文京ふるさと歴史館

BUNKYO MUSEUM NEWS

だより

▲笠井鳳斎画「本郷三丁目及同四丁目の図」『新撰東京名所図会』第四十九編より(*)

第23号／平成28年6月24日発行

文京の坂と海 ―団子、貝塚、シュリーマン― 2

『新撰東京名所図会』から見た本郷区 4

和辻哲郎と杉田直樹と谷崎潤一郎と
―『校友会雑誌』一六四号を巡って― 6

平成27年度のあゆみ 7

資料をご寄贈くださった方々 8

平成28年度の催し 8

文京の坂と海
―団子、貝塚、シュリーマン―

シュリーマンの菊人形見物一人案内記

欧米諸国では、19 世紀後半頃に、ジャポニスム（日本趣味）や、オリエンタリズム（東洋趣味）が流行しました。ロバート・フォーチュンやイザベラ・バードを始めとする多くの欧米人が日本を訪れては滞在記を認（したた）めており、そうした来訪者の一人にハインリッヒ・シュリーマンがいます。トロイヤの戦いを史実と信じ、私財を投じて発掘を行い、実在を証明したシュリーマンは、慶応元年（1865）に訪日します。著書では、将軍の隊列を横切って斬り殺された犠牲者の様子や、団子坂（現在の文京区千駄木）の植木屋、王子の茶屋など、江戸市中の見聞記を記しています。※1

団子坂の菊人形は、最盛期には大変に賑わい、夏目漱石の小説『三四郎』などにも題材として採られています。その団子坂上（現・文京区千駄木1-23-4）には森林太郎の自邸、観潮楼がありました。観潮楼とは、字句通りに解釈すれば、潮（海）を観る建物（楼）を意味します。

当館には時折、電話や来館者からの「観潮楼から本当に海が見えたのですか」という質問を頂きます。千駄木の地から東京湾までは最短距離で約8kmです。果たして観潮楼から海は見えたのでしょうか。

寺田寅彦かく語りき

『吾輩は猫である』の登場人物、理学者の水島寒月、そして『三四郎』に登場する物理学者の野々宮宗八のモデルとされるのが寺田寅彦です。

第五高等学校（現・熊本大学教養学部）で夏目漱石に英語を学んだ寺田は、漱石を介して正岡子規にも師事し、東京帝国大学理科大学（現・東京大学理学部）教授の傍ら、数多くの随筆を著しました。その内容は、本業の物理学をはじめ、美術や詩歌など多岐に亘ります。

以下に、「物理学と感覚」という、人の可視（かし）領域に関する寺田の興味深い随筆から、その一部を抜粋してみます。

「人間の肉眼が細かいものを判別し得る範囲はおおよそどれくらいかというと、まず一ミリの数十分の一以上のものである。最強度な顕微鏡の力を借りてその数千分の一以下に下げることは出来ぬ（もっとも、細かいものの見える見えぬはその物の光度と周囲の光度との差により、また大きさよりはむしろ視覚によるが）。そしてその物から来る光の波長が一ミリの二千分の一ないし三千分の一ぐらいの範囲内にあるのでなければ、もはや網膜に光の感じを起こさせることが出来ない」

また「とんびと油揚」と題した随筆では、上空150mの高さにいる鳶の、獲物の識別の可否を下記の様に説明しています。

「仮に鼠の身長を15cmとし、それを150mの距離から見る鳶の眼の焦点距離を、少し大きく見積もって5mmとすると、網膜に映じた鼠の映像の長さは5ミクロンとなる。それが死んだ鼠であるか、石塊であるかを弁別することには、少なくともその長さの十分の一すなわち0.5ミクロン程度の尺度で測られるような形態の異同を判断することが必要であると思われる。

しかるに、0.5ミクロンはもはや黄色光波の波長と同程度で、網膜の細胞構造の微細度いかんを問わずともはなはだ困難であることが推定される。」※2

人間と鳥の視覚能力との単純比較はできません。また、個人差も当然ありますが、人間が肉眼で約8km先の東京湾の海岸線を望むことは容易ではありません。ましてや、地形の起伏や障壁となる建物などが介在すれば、見通しの利かない場所を見ることは、実質的には困難なのです。

その証左となるのが、御茶ノ水のランドマークでもあるニコライ堂から撮影されたパノラマ写真です。※3

ニコライ堂は、明治 24 年（1891）に竣工します。その建築過程で塔上から撮影された写真でも、残念ながら海岸線は確認できません。観潮楼の所在地から海岸線までは、帝国大学や師範学校、湯島聖堂、そしてニコライ堂などの建物が林立し、二階建ての観潮楼より高い建物越しに海を眺めることは、物理的には不可能で、森の家族の言にも「海は見えなかった」とあります。※4

団子はやっぱり汐見に限る

海岸線から遠く離れた千駄木の地で、見えない海に因む建物の名前がつけられた理由は、縄文時代に遡ります。

団子坂と東京湾との位置関係

およそ5千年前の縄文時代前期の縄文海進の頃は、海岸線は現在より内陸部に位置していました。観潮楼の眼下を流れていた谷田川（別名、藍染川）沿いの地形上には、貝塚を伴う、縄文時代の集落遺跡が点在しています。※5

また奈良～平安時代に至っても、漁撈活動の痕跡を示す土錘が発見されています。過去の地球環境の変遷、数度に亘る海進・海退の過程で、当該地域一帯が、ウォーター・フロントに位置していた事実がわかります。※6

団子坂には実は、千駄木坂や七面坂、そして、汐見坂という別名があります。汐見、つまり観潮です。※7

人は、自らの俳号や、建物などに有職故実（ゆうそくこじつ）や四季などに因んだ名称をつけることがありますが、実際には海の見えない場所に立つ観潮楼の名は、原始～古代にかけての地理的環境に起因する“風流”や“粋”に因むものなのです。

動坂ムラに暮らしたひとびと

汐見の名に由来するとおり、武蔵野台地の東辺にあたる本郷

台地は、眼下に東京東部低地帯を臨み、遥か昔の縄文時代の頃には、遠浅の海が広がっていました。このような環境にある本郷台地の崖線（がいせん）近くには、貝塚遺跡が多く存在しています。動坂遺跡も、そうした遺跡の一つです。

明治年間から既に、縄文時代の貝塚として認識されてはいたものの、周辺地域の市街地化で発掘調査は行なわれず、長い間、いわば幻の遺跡となっていました。※8

昭和 49 年（1974）8月。都立駒込病院の外溝工事中に、貝塚の一部が発見されたことをきっかけに、翌 50 年4～7月にかけて、緊急発掘調査が実施されました。※9

発掘で出土した土器には一つの特徴が認められました。それは縄文時代の中期後半の頃にかけて作られたもので、主に東関東地方に分布する特徴を持つ土器（阿玉台式）と、西武蔵地域から相模地方を中心に分布する土器（勝坂式）とが、およそ4：5の割合で出土したことにあります。

このことから動坂遺跡を遺したのは、関東地方の東西に暮らしたひとびとの、地域間交流の場でもあった可能性が高いことが指摘されています。

鷹匠の住まいとして

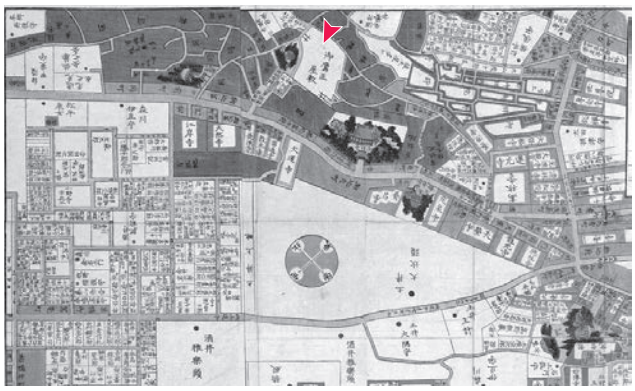
発掘調査では、江戸時代に帰属する地下室（ちかむろ）や井戸などの遺構群も確認され、陶磁器を主体とする生活什器類に加え、多量の動物遺体が出土したことも注目されました。

その動物遺体とは鳥類の骨です。種別の内訳としては、スズメ目 43、ハト目 34、サギ 12、キジ目9、ガン・カモ目8、ヒヨドリ目3、ヒシクイ・ニワトリ目2、カラス・ワシタカ目1（数字は推定個体数）などが確認されています。

遺跡の所在地について、江戸時代の地誌や資料類などを検討した結果、幕府の鷹匠たちが土地を拝領していた場所にあたっていることが判明しました。

こうしたことから、当該地点が間違いなく鷹匠の住まいであったことが、考古学的にも立証されたことになります。

鷹匠屋敷跡の調査は、江戸時代遺跡発掘の先駆的な事例となった点においても高く評価されているのです。



『東都駒込辺絵図』（▶が動坂遺跡の所在地）

動坂遺跡は遺った

日本では、遺跡の取り扱いは文化財保護法に基づき規定されています。その最大の特徴は、指定主義にあります。このことは端的に言えば、発掘調査を行なった後には、出土資料と記録資料だけを保管し、遺跡（遺構＝竪穴住居跡などの不動産資料）そのものは、開発工事によって永遠に失われてしまう、ということを意味しているのです。文化財保護法に遺跡の規定が明記された昭和 50 年は、“列島改造論”に代表される高度経済成長の過程にあり、「史跡」や「名勝」に指定され、保存された遺跡以外は、原則的に「調査はすれども保護されず」、日本各地で地域の文化財を守るための保存運動が起きていました。土地開発至上主義の風潮に対し、動坂遺跡を保存すべきであることを訴えたのは、その当時、東京都の文化財保護審議委員として動坂遺跡の調査団長を務めた、故・滝口宏早稲田大学教授です（後に名誉教授。平成4年1月逝去）。※10

滝口教授は、少年時代に本所横網の自宅が関東大震災で罹災し、青年期の約 20 年間を、動坂遺跡の所在する文京区本駒込の地に暮らしました。こうした経験が、動坂遺跡の保存に尽力する背景となったとも言えるでしょう。

動坂遺跡記念碑

滝口教授の熱意は、東京都の関係者を動かすこととなり、昭和 51 年1月 16 日、東京都の史跡として指定されることになったのです（東京都公報第 5518 号で告示）。「記録保存」の名の下に、発掘調査終了と同時に遺跡が消滅するのが通例の日本の文化財行政にあって、遺跡それ自体が「現状保存」で遺されることは非常に稀な事例です。このことは、区民をはじめとする全ての人々にとって、世代を越えて継承すべき貴重な文化遺産でもあるのです。

文京ふるさと歴史館は開館から四半世紀を迎えました。この間に、文京区内の遺跡の発掘調査件数も増加し、常設展示内容を修正すべき新たな知見や情報が得られています。

平成 28 年度の特別展では、文京区の先史・原始時代に関わる、『文京むかしむかし黎明編 ―うみ・やま・ひとの物語―』を開催します。どうぞご期待下さい。　（加藤　元信）

註

※1　石井和子 訳　1998 『シュリーマン旅行記清国・日本』講談社学術文庫
　　藤沢徹 訳　1982 『シュリーマン著　日本中国旅行記』雄松堂出版
※2　寺田寅彦　1997 『寺田寅彦随筆集』第1・4巻　岩波書店
※3　芳賀徹・岡部昌幸　1992 『写真で見る江戸東京』新潮社
※4　小堀杏奴　1981 「思出」『晩年の父』岩波文庫
※5　東京大学文学部考古学研究室編　1979 『向ヶ岡貝塚―東京大学構内弥生二丁目遺跡の発掘調査報告書―』東京大学文学部
　　千駄木遺跡調査会編　1989 『千駄木遺跡』千駄木遺跡調査会
※6　加藤元信ほか　1995 『龍岡町遺跡』文京区遺跡調査会
※7　文京ふるさと歴史館編　2013 『ぶんきょうの坂道』文京区
※8　岩崎卓也、榎本金之丞、木下正史　1967 「第二篇　原始時代の頃」『文京区史』巻一　文京区
※9　動坂貝塚調査会　1978 『文京区　動坂遺跡』動坂貝塚調査会
※10 我孫子昭二ほか　1992 「特集　滝口宏先生を悼む」『東京の遺跡』№35　東京考古談話会
　　増井有真　2014 「武蔵国分寺跡と考古学者　滝口宏」『武蔵国分寺跡資料館だより』第 19 号　武蔵国分寺跡資料館

『新撰東京名所図会』から見た本郷区

●『新撰東京名所図会』と本郷

『新撰東京名所図会』は、明治29～44年(1896～1911)の間に、雑誌『風俗画報』の臨時増刊として、東陽堂から発行されました。社主の吾妻健三郎は、安政3年(1856)に羽前国米沢(現・山形県米沢市)で、代々米沢藩の藩医を勤めた家に生まれました。健三郎は、明治6年に東京に出て印刷技術を学びました。明治10年、日本橋区葺屋町(現・中央区)で東陽堂を興し、明治28年に神田区駿河台袋町(現・千代田区)に移転しました。【図1】「駿河台東陽堂本店の図」は、『新撰東京名所図会　神田区之部』に掲載された東陽堂の社屋の様子です。ここには、健三郎の自宅と印刷工場もありました。健三郎は、大正元年(1912)に亡くなります。その訃報を伝える10月28日の『東京朝日新聞』に「我が銅石版界の恩人」、『読売新聞』に「石版印刷界の恩人」と評され、健三郎が、優れた印刷技術を持っていたことがわかります。『新撰東京名所図会』の挿絵の大半は石版印刷で、銅版印刷された本文に後から貼り付けられたものです。

【図1】

『新撰東京名所図会』の出版された明治時代、文京区は、小石川区と本郷区に分かれていました。本郷区は、「本郷区之部」として明治40年に発行され、編集は山下重民、挿絵は山本松谷、笠井鳳斎、写真は坪川辰雄が担当しました。区内を町ごとに分けて、その町内にある学校、寺社、名所、会社、商店などを挿絵や写真も使って紹介しています。本紙の表紙に掲載した「本郷三丁目及同四丁目の図」には、建ち並ぶ商店、交差点を通る市電、和服や洋装で歩く人々などが描かれ、明治の本郷界隈の賑わいがわかります。他にも、団子坂の菊人形や駒込追分などの挿絵や様々な町並みの写真があり、当時の本郷区の様子を知ることができます。【図2】「東京市本郷区」は、東京逓信局が発行した地図で、番地まで記入

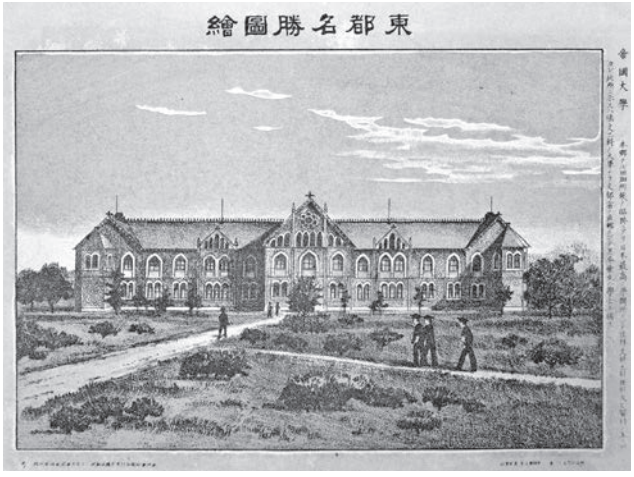
【図2】

されています。『新撰東京名所図会』には、会社や店の住所が記載されていることがあります。その場合、現在でもこうした地図によって場所を探すことができます。

●東京帝国大学

『新撰東京名所図会』では、現在の東京大学について、次のように書かれています。

東京帝国大学は、本郷元富士町一番地にあり、大学院及分科大学を以て構成す、大学院は学術技芸の蘊奥(うんおう)を攻究し、



【図3】

分科大学は学術技芸の理論及応用を教授する所なり、

大学の住所と大学院と分科大学から成ること、大学院は、学術技芸の核心となる大切な事を究め、分科大学は、学術技芸の理論と応用を学ぶところであるとしています。この文章の後に、大学の歴史、分科大学の紹介、大学の施設などについて触れています。【図3】「東都名勝図絵　帝国大学」は、法科大学と文科大学の建物を描いています。絵の右端には、「本郷ナル旧加州候ノ邸跡ニアリ日本最高ノ学問所ニシテ法科文科工科理科及ヒ医科ノ五ニ別カレ…」とあり、分科大学の各科を紹介しています。制服姿の学生が校舎に向かって歩いていますが、制服について『新撰東京名所図会』には、「本学々生は明治十九年四月二十八日達第三号に依り、一定の制服制帽を着用すべきものとす。」とあります。

●本郷館

本郷館は、「本郷四丁目二十二番地」（現・本郷4丁目37）、本郷通りと菊坂通りの角にあった勧工場（かんこうば）です。勧工場は、明治10年、上野で第一回内国勧業博覧会が開催された際に売れ残った出品物を販売するために、辰ノ口（現・千代田区）に官営の勧工場ができたのが始まりです。また、勧工場は、同じ建物の中に、いくつかの小売店が出店する形態で、デパートの先駆けとも言われています。その後、民営の勧工場が各地で設立され、明治37年発行の『東京明覧』に、「若し一たび其場内に入れば欲する所のものとして得られざるはなく且各品定価を附して値を上下するの煩なし」と紹介されています。勧工場では、欲しいものが手に入り、定価が書いてあるため、商品の値段が上下する心配がないと、特徴を挙げています。

本郷館は、明治24年12月に開業しました。『新撰東京名所図会』には次のように紹介されています。

【図4】

勧工場本郷館は本郷四丁目二十二番地にあり、本郷大通に面し、本郷より菊坂に分岐する道路の曲角なり、十年前、本郷に三勧工場あり、本郷館、龍岡館、信富館是れなり、（中略）今や区内の勧工場として、一の本郷館を有するに過ぎざるなり。

『新撰東京名所図会』の書かれる十年前までは、本郷に勧工場が3ヶ所ありましたが、今は、本郷館だけになったとあり、中略した部分に、龍岡館、信富館の廃業の経緯が書かれています。【図4】は、『新撰東京名所図会』に掲載された「本郷四丁目本郷館前」です。写真左に、本郷館の建物の一部が写っています。『第七回東京市統計年表』によると、明治41年、本郷館には、25軒の店があり、その内5軒が外国の商品を扱う「洋物売店」でした。【図5】「本郷四丁目勧工場冬物売出しの広条」は、本郷館のチラシです。冬物の売り出しと、11月1日から3日の間に粗品を進呈すると宣伝しています。「雨天順延ノ事」とあるのは、雨が降ると客足が鈍るためでしょうか。

本郷四丁目勧工場冬物賣出しの廣條

本館わ順客諸君の信用を博し爲に日一日と繁榮に進み館内出品者すの喜ひ實は雀躍にたへずこれに依て左の日限より三日間冬物賣出しを執行仕出品々には新規精良の内外品を陳列し價額わ勉めて低廉なるを目的と致し又御求の諸君へは粗景を添へ聊か往來の御禮迄にいたし度何卒御遊覧御購求之程館内一同擧て奉希望候敬白

十一月一日より三日迄三日間粗景ヲ呈ス

（雨天順延ノ事）

木郷四丁目

本郷勧業場

出品人一同白

【図5】

明治29年発行の『新撰東京名所図会』の凡例には、「本書は極めて精確を期するが故に。記者画工を伴ふて実歴精査し。或は照会して質問し。更に諸史書に徴して折衷考証する所あり。」と書かれています。記者や画家が、それぞれの区や町を訪ね、記事や挿絵、写真を準備していたことがわかります。さらに、記事の内容を調べて、様々な書物に照らし合わせ、まとめ、説明していました。本郷区でも、町々の調査がされ、記事が書かれたと考えられます。今年度の収蔵品展では、平成26年度収蔵品展「明治・大正の小石川を訪ねて―『新撰東京名所図会』展」に続き、『新撰東京名所図会』を中心に関連する館蔵資料から、本郷を紹介します。

（会期：平成29年2月11日～3月20日）。

（齊藤　智美）

【参考文献】

遠藤綺一郎『吾妻健三郎伝』2005年　よねざわ豆本の会

東京市役所『第七回東京市統計年表』1911年

和辻哲郎と杉田直樹と谷崎潤一郎と
―『校友会雑誌』一六四号を巡って―

明治 39 年（1906）9 月、姫路から上京して第一高等学校（現、東京大学教養学部）の東寮一号室に入った和辻哲郎（1889～1960）は、同じ新入生で東寮五号室の春山武松（1885～1962）と、すぐに仲良くなりました。同郷で、千駄木の郁文館中学（現、郁文館夢学園）出身でもある春山は、和辻の姫路中学時代の親友黒坂達三とも親しく、和辻にとって、共通の話題のある親しみ易い相手でした。

和辻は、入学式の日（9/15）に春山から、二年生の杉田直樹（1887～1949）を紹介されました。杉田も郁文館の出身で、やはり黒坂とも親交がありました。和辻は、杉田ともすぐに仲良くなり、互いに文学や思想などについても議論するようになりました。また春山とは、一緒に本郷座や若竹亭などに出掛け、芝居や娘義太夫などを見るようにもなりました。

東京で出来た新しい友人たちは、中学時代には文学について誰とも語り合わなかったという和辻にとって、大きな刺激を与える存在だったでしょう。

杉田直樹の文芸部委員就任

一高では、学生から選ばれた文芸部委員によって、『校友会雑誌』が編集発行され、毎号学生や教員による論考や詩文、運動部の動向などが掲載されていました。また前号に掲載された作品に、文芸部委員が批評を加える前号批評欄があり、活発な議論がおこなわれていました。

明治 40 年1月 22 日、校内で選挙が行われ、杉田が新しい文芸部委員に選出されました。この時に選ばれたのは、杉田の他に、谷崎潤一郎、田中徹、岸巖、行森昇の4人でした。杉田たちは、2月1日に前任委員からの引継ぎを受け、翌日には『校友会雑誌』164 号の編集委員会を開きました。杉田はこの編集委員会で、前号に掲載された「史劇観を評す」の批評を任されました。

（明治40年5月撮影　新旧文芸部委員
前列右から杉田、谷山教授、新渡戸校長、後列一番右が谷崎）

『校友会雑誌』への投稿

杉田が任された「史劇観を評す」の批評とは、162 号に掲載された佐久間政一「史劇観」を批評した栗原武一郎「『史劇観』を評す」（163 号）に、さらに批評を加えるものでした。

執筆に取り掛かった杉田は、翌日寮から和辻を誘い出し、隅田川周辺の散歩に出掛けています。三囲（みめぐり）神社、百花園などを巡りながら、杉田は和辻に自分の史劇観評について熱く語りました。散歩から帰ってもその熱は冷めず、一度帰宅した杉田が再度寮を訪れて和辻と春山を誘い、今度は自宅で夜遅くまで芸術論を戦わせました。

この日の杉田の熱に影響されたのか、2 月 11 日には和辻が杉田の所に原稿を持参してきました。入学直後から創作活動に興味を示していた和辻にとって、近しい友人の文芸部委員への就任が、作品投稿の一つの契機となったのでしょう。

（「第一高等学校々友会文芸部」用紙に書かれた
杉田直樹『趣味涵養論』（165号に掲載）原稿）

『校友会雑誌』一六四号

杉田による「史劇観を評す」の批評は、「一己の芸術観より栗原君の『史劇観を評す』を再評す」という題の論稿として、2 月 25 日発行の『校友会雑誌』164 号に掲載されました。杉田はこの他にも、イギリスの詩人パーシー・ビッシュ・シェリーを論じた「シエレーを愛す」という文章が、沙木庵というペンネームで掲載されています。また和辻の小説「炎の柱」も、掲載されています。余談ですが、この号には谷崎の原稿も掲載される予定でしたが、故障があって掲載を見送られたそうです。

杉田と和辻の原稿は、165 号の「前号批評」欄において、谷崎の批評をうけました。和辻の小説は、「美しい長閑な心地のする文」と褒めながら、夏目漱石の文体への傾倒を指摘されています。谷崎は、一高時代には和辻との交流は無かったと言っていますが、後年になって「炎の柱」に描かれた美しい京都の風景を、「羨ましく思った」と回想しています。

和辻は、この後も盛んに『校友会雑誌』に投稿し、翌年には杉田たちと交代で、文芸部委員に就任しました。大学時代には、第二次『新思潮』創立にも関わった杉田、和辻、谷崎の交流は、こうして文京の地で始まりました。　（加藤　芳典）

参考文献：和辻哲郎『自叙伝の試み』中央公論社、昭和 36 年
参照：杉田直樹『日誌』明治 39 年 7 月～40 年 3 月（館蔵）

平成27年度のあゆみ

小・中学生のための歴史教室

「わがはい君捜索隊 絵の中からさがしてみよう！」
◆7月18日（土）～8月30日（日）　参加者数……172人

特別展

「復興への思い ー生きよ！もっと強くー」
◆10月31日（土）～12月13日（日）（延べ38日間）　入館者数……2,938人
◆記念講演会
　11月8日（日）　会場：文京区男女平等センター　参加者数……91人
　「安吾と本郷界隈」／坂口綱男氏（写真家）
◆展示解説　11月18日（水）、11月27日（金）、12月3日（木）、12月8日（火）

収蔵品展

「はかる」
◆2月13日（土）～3月21日（月・祝）（延べ33日間）　入館者数……2,162人
◆展示解説　2月16日（火）、2月28日（日）、3月17日（木）
◆手回し計算機の実演　2月24日（水）、3月3日（木）、3月13日（日）

文の京ゆかりの文化人顕彰事業

◆朗読コンテスト
　応募総数169人（一般の部121人、青少年の部48人）
　本選10月18日（日）　参加者・観覧者数……154人
◆史跡めぐり　「文人のまち本郷と学者町西片を訪ねて」
　12月6日（日）　参加者数……47人
◆シンポジウム　「社会を輝かせる女性たち
　　ー広岡浅子の拓いた日本の女性高等教育、そして世界へー」
　2月23日（火）　参加者数……332人
◆文学コーナー・ミニ展示　「谷崎潤一郎」
　2月13日（土）～3月21日（月・祝）
◆歴史講座　「谷崎潤一郎 ーその生涯と文京のゆかりー」
　　／千葉俊二氏（早稲田大学教授）
　3月6日（日）　会場：文京区男女平等センター　参加者数……108人

ミニ企画

◆3月25日（水）～6月21日（日）　「文京区有形文化財指定記念　特別公開
　　安政年代駒込冨士神社周辺之図及び図説」
◆6月24日（水）～10月3日（土）　「大正14年の東京見物」
◆10月4日（日）～12月25日（金）「お茶の水の名花 ー大正女子テニスの黎明ー」
◆1月5日（火）～4月24日（日）　「文京のものづくり ー御法川直三郎の発明ー」

史跡めぐり

◆第1回　6月12日（金）　水無月の小石川を歩く　参加者数……49人
◆第2回　11月12日（木）　文京区内の震災・戦災史跡を訪ねて
　　参加者数……50人
◆第3回　3月14日（土）　親子で楽しむ東大キャンパス！弥生土器ってなんだろう？
　　参加者数……60人

歴史教室

特別展講演会

収蔵品展

歴史講座

ミニ企画

史跡めぐり

平成28年度の催し

※それぞれの事業の開催日時や募集方法等は、歴史館ホームページおよび「区報ぶんきょう」にて、お知らせします。

小・中学生のための歴史教室
この形はなんだろう？　わがはい君シルエットクイズ
7月17日（日）～8月31日（水）
館内に展示されている様々な道具について、シルエットを手がかりにクイズに挑戦してもらいます。事前申込不要。参加者には記念品を贈呈。

特別展
文京むかしむかし黎明編　―うみ・やま・ひとの物語―
10月22日（土）～12月４日（日） ※11月3日（文化の日）は無料公開日
文京区の先史・原史時代の遺跡の調査成果と、こうした遺跡の発掘に携わった考古学者や人類学者たちの足跡を紹介します。
特別展入館料：300円（20人以上の団体210円）

史跡めぐり
歴史館友の会まち案内ボランティアが、区内の史跡等をご案内します。
年3回（6月、11月、3月）開催予定。要申込（往復はがきにて）。
参加費　保険40円・入館料等実費。

区制70周年記念事業　収蔵品展
明治・大正の本郷を訪ねて　―『新撰東京名所図会』展Ⅱ―
２月11日（土・祝）～３月20日（月・祝）
『新撰東京名所図会』の「本郷区之部」を中心に、その内容に関連のある館蔵資料を展示します。

文化人顕彰事業　朗読コンテスト
本選10月30日（日）
文京ゆかりの作家の作品を朗読。今年の課題作家は宮沢賢治です。
コンテスト形式で優秀者を選び表彰します。
※参加者・観覧者募集の方法等は、ホームページなどでお知らせします。

文化人顕彰事業　歴史講演会
今年は生誕120年を迎える宮沢賢治をとりあげます。
11月12日（土）14時～
会場：文京区民センター　3-A会議室
講師：宮澤和樹氏（賢治の実弟・清六の孫）
参加費：200円　要申込（往復はがきにて）

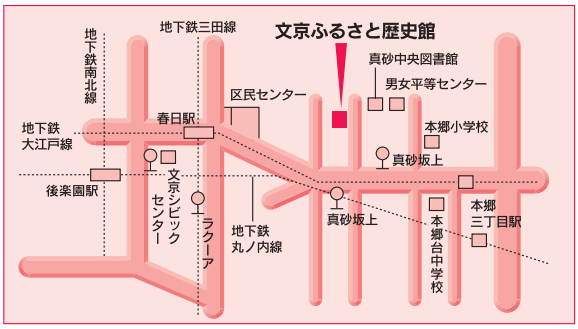
文化人顕彰事業　史跡めぐり
実施日未定。要申込（往復はがきにて）。
参加費　保険40円・入館料等実費。

レファレンス
毎月第２・４木曜日13時30分から16時30分まで、館内1階レファレンスコーナーにて、ご質問にお答えします。

常設展示ボランティアガイド
ふるさと歴史館ボランティアガイドが、毎週土・日曜日、13時から17時まで常設展示の解説を行います（申込不要・無料）。
上記日時以外のご希望も受付けています。２週間前までに、文京ふるさと歴史館へ電話連絡し、申請書を提出してください。

利用のご案内

◆開館時間：午前10時から午後5時まで
◆休 館 日：月曜日・第4火曜日（休日にあたるときは翌日）
くんじょう期間、年末年始
◆入 館 料：一般個人100円、団体（20人以上）70円
中学生以下・65歳以上無料
＊特別展は別に定めます
◆交　　通：東京メトロ丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目」から徒歩5分
都営三田線・大江戸線「春日」から徒歩5分
都営バス 都02 上69「真砂坂上」から徒歩1分
文京区コミュニティバスBーぐる「文京シビックセンター」または「ラクーア」から徒歩10分
◆ホームページ：http://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/



文京ふるさと歴史館
〒113-0033　東京都文京区本郷四丁目9番29号　電話(03)3818-7221

＊〔表紙の絵について〕笠井鳳斎について著作権者をできるかぎり調査しましたが、連絡先が確認できませんでした。著作権者についてお気づきの方は、文京ふるさと歴史館までご一報いただきたく、お願い申し上げます。

印刷物番号 J0216003